

サボテン、サンボテ、サボンテン

今野尚子

江戸時代に盛んに研究されたもののひとつに「唐話」がある。唐話とは近代中国語のことであるが、鎖国時代の日本に長崎を通じてもたらされ、読本や洒落本などに影響を与えただけではなく、国語研究にも新しい局面をひらいたということがすでに指摘されている。その唐話の辞書中最大の語彙を擁し、他書にも大きな影響を与えたとされているものに伊藤東涯の『名物六帖』がある。東涯には別に『応氏六帖』という書があって、現在十本ほどの写本が伝わっている。『応氏六帖』は『名物六帖』の「ある時期のすがた」であるとい一般にいわれている。しかし、まず全体の構成からみても大きな異なりがあり、『応氏六帖』の延長線上に『名物六帖』があるという単純な図式ではとらえにくいようである。

さて、この『名物六帖』の中に「サボテン」という項目がある。この部分は「名物六帖」の中でも刊行はされておらず、天理図書館に所蔵されている稿本には「仙人掌」と「霸王樹」とが掲げられている。同じく天理図書館に、東涯の勉強ノートともいべき『紀聞小牘』二十九冊が所蔵されている。この第九冊にやはり「仙人掌」がみえる。ただし傍訓は「名物六帖」の「サボテン・サボン」に対して『紀聞小牘』では「サボデン」である。この『紀聞小牘』第九冊は「訓詁名物志」と名付けられたうちの一冊で、元禄九年に東涯自身によって装釘されているが、「仙人掌」を含むいくつかの項目については「花鏡の抄出本によったので注が不備である」という宝永元年の東涯自身のコメントがある。

以上二つの東涯の著作における「仙人掌」は「サボテン・サホンテン・サボデン」である。

ところで『応氏六帖』にも「仙人掌」が掲載されているが傍訓が前述の二書と少し異なっている。八本を調査した結果をつぎに示す。

○サホンテン 山田忠雄氏蔵本

長沢規矩也氏蔵本

○サホンデン 国立国会図書館本

早稲田大学図書館本

○サボンデン 無窮会神習文庫本

○サボテン 静嘉堂文庫本

神宮文庫本

○東京大学本は傍訓センニンシャウ、注にサボンテンとある。

『応氏六帖』諸本では八本のうち六本（東大本を含めて）までが「サホンテン・サホンデ

ン・サボンデン」型の傍訓を附している。このことをどのように考えればいいのであろうか。

サボテンは江戸時代に入ってから日本にもたらされたものらしく、江戸よりも前の文献には見出すことができない。東涯が宝永元年に「花鏡」からの注についてコメントしている『紀聞小牘』の記載は、早い時期のものであるのかもしれない。唐話辞書には、東涯の『名物六帖』をはじめとして「サボテン」を載せるものがいくつもある。「学語編」には「霸王樹／仙人掌」を掲げ「サボデン」の傍訓がみえるし『徒杠字彙』の「仙人掌」の注「花鏡ニサボテン」は東涯の記事と重なる。『游焉社常談』には「霸王樹」に右訓「パアワンジュ」、左訓「サボテン」が附されている。このように「サボテン」型の訓が多い。

また『雑字類編』には「霸王樹・仙人掌」を掲げ右訓サボテン、左訓サ、ラサツホウがみられる。「ササラサツポウ」は『日本国語大辞典』に①ささらの先。またそのように先端がさざくれているもの②サボテンの異名(以下略)とある。トゲの多いサボテンの形態からの命名と考えられる。『和漢三才図会』でも、絵入りで掲載されている「サボテン」

にはまず「さくらさつほう」それから「さんぽて、いろへろ、タウナス」の名があげられており、「サボテン」はみえない。

小野蘭山の『本草綱目啓蒙』は「サボテン」の異名の集大成ともいうべきもので、「サンボテイ サボテン サンボテ 予州イロヘロ サチラサツポウ トウナツ トウナス 薩州 ニヨロリ 予州」という八つの語形を掲げている。「トウナス」といえばカボチャを思い浮かべるが、「薩州」とあるとおそらく薩摩ではサボテンのことを「トウナス」と呼ぶようである。『南山考講記』に「仙人掌スズシヤントウナス」とあるのもそれを裏づけるであろう。

江戸時代の「サボテン」には以上みてきたように大きくわけると「サボテン」、「ササラサツポウ」、「トウナス」という三つの名称があったということになる。「サボテン」型の語には「サンボテイ、サンボテ」という変化形(もちろんサボテンが原形ということではないが)がみられた。ところが『応氏六帖』で優勢であった「サボンテン」型の語は他の文献に見出すことができなかった。

『応氏六帖』の傍訓は、諸本によって独自に附していると思われるものもあり、諸本の関係さざる決め手とはなりにくいのであるが、

ここで他の文献に見出しがたい「サボンテン」型の傍訓が優勢であることは示唆的である。あるいは『応氏六帖』の原態に近い本の中に「サボンテン」の傍訓が附されていたのではないだろうか。『応氏六帖』の中ではそれが保存されていたと考えられる。しかし時代の趨勢は「サボテン」であった。『名物六帖』が「サボテン、サボテン」と附訓するのはそのような状況と関連があるかもしれない。幕末の嘉永年間に出版された「新板植木のはんじもの」というおもちゃ絵がある。いろいろな植物の名を、描かれている絵からあてる趣向である。この中につきのような絵がある。帆にひらがなの「さ」と左下に点が二つ。その下におみこしの屋根の部分。帆の部分が「さぼ」、それに「てん」を加えて「さぼてん」。幕末には「サボテン」が「はんじもの」のひとつとして掲載されるほど植物としてもことばとしてもポピュラーなものとなっていたことがうかがえるのである。明治時代に入って、『和英語林集成』(第三版第二種)には「SABOTEN サボテン」「CACTUS, n. Saboten」とある。